



LA NOUVELLE

N°5 AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 神奈川孝子 (昭37)
2010.9.15 発行

フランス語と私、そして時々トルコ語

川口 裕司 (昭56)



「なぜトルコ語なんですか？」世間ではフランス語一筋と思われているのか、よくそう聞かれる。そんなときは決まって、オスマントルコ史への憧れ、ピエール・ロティの描く幻想都市スタンブル、アジアとヨーロッパの架け橋イスタンブール、果ては日本語とトルコ語がよく似ていることまで説明して、ありとあらゆる因果を動員して相手を説得しようと努めるのだが、本当の理由を一番知りたがっているのは、実はこの私なのだ。そう思って原稿を書いていると、突然、記憶が1984年に向かって横滑りし始めた。

学部3年生のとき、フランス語の勉強にも飽き、毎週1回、虎ノ門の国立教育会館でトルコ語講座を受講するようになった。講師は今亡き大島先生。外語にまだトルコ語専攻がなく、日本語で書かれた教材も辞書もなかった。そんな時代にトルコ人と簡単な会話ができ、体系的に文法を学べるこの講座はとて新鮮だった。2年間通い詰めた。卒業して大学院へ進学すると、今度はトルコ語学をもっと専門的に勉強したいと思うようになり、ついにはトルコ政府から給費をもらってイスタンブールに留学する目標を立てた。とはいえトルコ研究は歴史学と政治学が大勢を占め、フランス語学からトルコ語学へ転身した者に入り込む隙間などないことは判っていた。周りの不審感とそこから疎外感を感じつつも、幸運にも1982年秋から1年間イスタンブール大学文学部でトルコ語を研究する機会を得た。ところが苦勞してつかんだイスタンブールは1980年9月12日に起きた軍事クーデターのせいで、社会はまだ抑圧の淵に沈み、重苦しい雰囲気が街角に漂っ



イスタンブール

ていた。

あれからもう30年も経ってしまった。その後トルコ語学は目覚ましい発展を遂げた。もしも今同じように留学しておれば、フランス語とトルコ語の関係は逆転していたかもしれない。そんなイスタンブール留学は、トルコ語学に対する失望とトルコ人との友情の連続だった。留学の決定をある先生に知らせた時、「それは良かった。でも早く帰ってきなさい。」という忠告をいただいたのだが、大学院生の私には、その真意が現地へ行くまで理解できなかった。

留学期間が終わるとイズミールから海路でイタリアへ向かい、フランス経由で1983年秋に帰国し、海泡石のパイプを持って、その年の暮れに田島先生と渡瀬先生に帰国報告に行った。こちらの不安をよそに、両先生の対応は、まさに拍子抜けするほど自然だった。フランス語学と直接関係のない横道に逸れた学生をいつも通り迎えてくれたのだ。教師になってみて初めて実感するのだが、学生との関係というのは実にデリケートだ。学生を生かすも殺すも教師次第、確かにそうかもしれない。そんなわけで1984年に文部省の給費生として

パリに行くことになったとき、私は素直にフランス語学に戻ることができた。

あの日からずっと、そして時々トルコ語の生活を送っている。静岡大学でも外語でも、有志の学生を集めてトルコ語を教えたし、朝日カルチャーセンターで講座を担当した。記憶から消えることがないように、まるで自分へのメッセージと思い出を書き留めておく日記みたいに、時を選ぶことなく散発的にトルコ語学の論文を書いてきた。このようにトルコ語は、フランス語とは全く異なるリズムで、節目ごとに私の人生の中に立ち現れてくるのだ。おかげですっかり二つの専門分野をもつことに慣れてしまった。

教師がこんなだからであろうか、ゼミには中国語、ポーランド語、イタリア語、ドイツ語などから、二足ワラジ履きか後を絶たない。数年前には、フランス語専攻でありながら、トルコ語を見事にマスターし、イスタンブール留学を経て、ついにはトルコ語専攻の競争相手を尻目に、在外公館の試験に合格してイスタンブール領事館に勤務する学生まで出た。帰国したら彼女も私と同じ岐路に立たされるのだろうが、彼女なら私よりもっと勇氣ある決断をするに違いない。私だって負けてはおられない。1984年に立ち戻って、改めて考えるべき時なのかもしれない。それにしてもこうしてトルコ語について考える機会を与えてくれたのが、LA NOUVELLEであったというのは、なんとも不思議な巡りあわせだ。すっかりトルコ語との出会い話に終始してしまっただが、今度こそ、もう誰からも「なぜトルコ語なんですか？」と問われることがないようにしたいものだ。



ゼミの学生たちと

仏友会総会報告

金澤脩介 (昭43)

第14回仏友会総会は4月24日(土)東京・大手町サンケイプラザで開催された。神奈川会長からは開会挨拶後、伝統ある「仏友会の歴史」と古い会報、府中キャンパス内に新設された「アグロ・グローバル」(同ホールの椅子9脚分のネームプレートに「仏友会」の名が刻印)、秋の東京外語会旅行(南仏・パリ10日間)、新幹事の選任(現幹事12名に新幹事2名の名前。任期は2年)などについて説明があり、了承された。新幹事は中村日出男(昭49年)と宮澤樹実子(平10年)の両氏。藤倉副会長からは会計・会務報告があり、出席会員の賛同を得て了承された。また川口副会長からは前年度からスタートしている「大学院大学」の現況報告、教授陣の異動(西永教授の定年退職に伴い、後任に桑田講師が着任)、寄付講座(講師：斎藤弘元山形県知事)、仏友会からの外語祭の語劇支援について謝意表明と本総会に大塚さん以下6名の在学生会が参加・出席している旨の報告があり、満場の拍手で大歓迎を受けた。(参加者は60余名)

続いて波多野宏之氏(昭和44年卒、駿河台大学副学長、元国立西洋美術館主任研究官)による講演が行われた。演題は「情報メディアの伝統と革新—フランスの図書館・美術館に学んで」。時代の先端を行くデジタル技術、画像ドキュメンテーションの話を中心に「文化財」の保護・保存・活用について、「文化大国、ミュージアム大国フランス」での貴重な研



究・経験をもとにレジュメやプロジェクターを利用して説明。

本学出身で図書館・美術館勤務という異色の経歴を持つ同氏は、1964年(東京オリンピックの年)にフランス科に入学。この年はミロのヴィーナスが初めて来日し、上野の西洋美術館に展示された年で、またサルバドール・ダリの作品が来日した年でもあった。

入学後西ヶ原の校舎で、帰国して間もない篠田浩一郎先生のスライド写真による授業があったが、この時かなり鮮烈な印象を持ったとの説明があった。篠田先生が留学中にフランス国内を精力的に旅行し見聞されたこと、特にロワールの城やラスコーの洞窟壁画などについて授業で熱っぽく説明されたことがご自身の進路を決定する要因の一つになったことだった。この時の篠田先生による「フランス事情」は後に『フランス 美と歴史の発見』(1967年)として発刊された。ご自身の著作物と共に大事に保有されている同書を持参、紹介された。

またレジス・ドブレ著(後のミッテラン政権の外交顧問)『革命の中の革命』(1967年刊、谷口侑訳)やアンドレ・ブルトン著の『シュールレアリスム宣言』(1924、現代思潮社1961年)なども触発された図書として紹介。特にドブレは後にメディアロジーの体系を作っていくことになる。(レジス・ドブレ著『メディアロジー宣言』1994、NTT出版1999)

専門的な分野の話をご自身の2度に亘るフランスでの研究[1984-85年仏政府給費留学(ポンピドー・センター)、1995-96年文部省在外研究(ルーヴル美術館内文化省中央図書館・アルシーヴ)]時の貴重な体験などを交えて、情報メディアにおけるフランスの特質、情報メディアの変遷、国としての姿勢、日仏情報文化交流、日本での今後の展望などについて略年表に沿って、分かりやすく説明。

日本は公文書管理法制定(2009)など法制面の整備、

文化財の保護、作品のデジタル・データ化、ネットワーク化という点でフランスの文化政策から多くを学ぶ必要があると力説。また現在大学で教鞭を取られているご専門の「文化情報学」(博物館・図書館・文書館、映像、観光情報、コンピュータなどの総合学)やメディアロジーの概要についても説明。

2008年は日仏交流150周年であり、2009年はアート・ドキュメンテーション学会創立20周年の年であった。同氏は入学から1968-69年の学園紛争時にかけて中野区上高田の日新寮に寄宿していたことから6月卒業となった旨の説明と共に、もと関東大震災の避難収容受入れの場所でもあった日新寮を貴重な「時代の記録」として「日新寮アーカイブズ」の形で残す作業に取り組んでいることにも言及。出席の同窓生は諸先輩が残された「(伝統ある)仏友会の歴史」もデジタル文書・画像化して是非残したいと強く思ったに相違ない。

講演終了後の懇親会は幹事の和賀さんの軽妙で楽しい司会進行で開始。総会に参加され、乾杯の音頭を取られた谷口侑氏(昭37年)からは「自分の訳書がこのような形で外語の後輩に間接的な影響を与え、思わぬ絆でつながっていることに驚きと感慨深いものを感じる」とのご挨拶があった。また在学生会各自の若さ溢れる挨拶は懇親会に新風を吹き込んで、更に活気溢れるものとなった。懇親会は準備された紅白のワインと料理で終始和やかな雰囲気の中で行われ、なかなかの盛会であった。

会員各位のご出席、ご協力誠にありがとうございました。



学生さんと一緒に 1



学生さんと一緒に 2

束の間のパリ紀行

藤倉洋一（昭45）

もしパリに24時間滞在するとしたら何をしますか？考えるだけでも楽しい街である。4月の中旬、ヨーロッパのブダペストとウィーンを駆け足で回る途中、1泊だけパリに立ち寄った。十数年ぶりの訪問である。

できるだけ歩き回ろうと思った。思いっきりパリの空気を吸おうと思った。幸い天気も申し分ない。どこを選ぶか？バステュー広場近くの3ツ星ホテルにチェックイン後、すぐオペラ通りの南端にあるカフェに向かった。実は大昔このカフェの前の交差点で我がブルーバードがエンコし、警官に押ししてもらって、臨時駐車させてもらった場所だ。カフェで時間を潰している連中がじろじろ見ているバツの悪い思いをした。カフェの1階でjetonを買い、2階にあるダイヤル式電話でレッカー車を呼んだのだ。カフェで座って待つ間の心地悪さ。カフェの名前は「Café de la Comédie」だった。思い出せず長年心に引っ掛かっていたことである。

観光客でにぎわうルーブル美術館（かつてはフランス大蔵省が入っていて、ブリュッセルから出張してきたものだ）の中庭を横目にセーヌ川に出る。ゆったりした流れは変わらない。川に沿って少し下ると芸術橋だ。ここで確かめたいことがあった。橋の欄干の金網に、恋人たちが残っていた錠前がたくさん掛かっているというのだ。永遠の愛を誓った二人が錠前に名前などを書き込み、金網に掛けて錠をかけ、その合鍵をセーヌ川に投げ込むのだという。なるほど錠前が数知れずあって、愛が残したちょっとした光景ではあった。

噴水を囲んで時間の移ろいを楽しむ人々がいるチュイルリー公園を抜けて、コンコルド広場からシャンゼリゼ通りを上った。露天のカフェに座り一休みしながら絵葉書を数枚認める。7時半だというのにまだ明るい。息つくたところでCDショップ「VIRGIN MEGA」を目指す。名前の通り大きすぎて目的のシャンソンのCDを探すのが大変。アズナブルなどを5枚購入した。帰国して分かり感激したことが、この歌手のCDはオランピア劇場で収録されたものだった。アズナブルが何度オランピア劇場で公演したか知らないが、かつて私も一度だけ家族とそこで聴いたことがある。ただその時の録音かどうかは不明だ。特に「Isabelle」は秀逸で、真っ暗な客席通路で突然スポットライトを浴びたこの歌手の黒ずくめの装いは今でも脇の奥に焼きついている。シャンゼリゼからエトワール広場に向かうと凱旋門の後方に大きく真っ赤な太陽が沈んでいくところであった。

翌朝、開館前に、オランジュリー美術館に行った。すでに定年退職して奥さんと2人で10日間のパリ見物を楽しんでいる日本人が開館を待っていた。羨ましい限りだ。モネの「睡蓮」が長い間改装工事で見られなかった美術館だ。デジカメは自動的にフラッシュが出てしまうのだがと相談

した若い男性の監視員はフラッシュが出ないようにカメラを操作してくれ、その上、この美術館はモネの意向を尊重して、自然光を取り入れて見せるための工事だったために長期間を要したのだと丁寧に説明してくれた。

さて、今回の目玉はなんと言ってもマレ地区の散策。なかんずく、パリの歴史を見せてくれる「カルナヴァレ博物館」であった。優雅な雰囲気のある館が多いこの地区はもっともパリらしいところかもしれないが、ゆっくりと見て回った記憶がない。Victor Hugo 記念館のあるパリ最古のヴォージュ広場は新緑の緑がまぶしく、周りを取り囲む瀟洒な建物は見ているだけでゆったりとした豊かな気分になれる。物乞いの老女を追い払うマダムもいたりする。老女の杖を蹴飛ばして容赦がない。これも大都会の現実的な一面だ。

「カルナヴァレ博物館」では2つの作品を見たいと考えていた。入り口では、誰にでも気さくに話しかける人のよい中年男の案内係がいて、中国人と間違えられた。そういえば、パリでは日本人の影がうんと薄くなったような気がする。見たい作品の一つは、ミュシャの「ジスモンダ」。すぐには見つからず、2階の一番奥の部屋だという。しかし、その部屋に到着したとき、黒人の監視員が「Fermé! 見たかったら、2時半に来てくれ」と言う。今から昼食に行くのだ。遠くから来たのだから、と訴えても「Ce n'est pas ma faute」（俺のせいじゃないよ）と無残にも取り合ってくれない。これがパリだ。仕方なく、こちらも昼食を済ませ戻ってきた。でも鑑賞できたのは、ミュシャでも孔雀がモチーフの宝飾であった。

もう一つ見たいのがレオナルド・フジタの絵だ。これもなかなか見つからない。監視員に聞くのだが、誰も知らない。大体、一部屋ごとに監視員が一人ついているのは多すぎないかと考えてしまう。パリ市の雇用対策に貢献しているのだろうか…と考えているうちに、知っているというベテランの女性監視員に出くわした。博物館の写真集をめくりこれだと教えてくれた。確かにフジタの絵だが、「Un bistrot」という作品で、お喋りに興じる人々が明るく軽いタッチで描かれている。探していた「エドガー・キネ・ホテル」とは違うのだが、まあいいか。その監視員によれば、ついこの間までこの絵は掛かっていたが、最近外されてしまったのだという。これで万事休す。でも、この監視員はご親切にも「もしどうしても観たいのなら、ここに電話して交渉すると良い」とまで言って、電話番号を書いてくれた。ありがたいアドバイスだが、そこまでする時間はない。

マレ地区名物の Passage（アーケードの商店街）にある「Musée Grévin」は団体の子供たちでごった返していた。この春NHKテレビでも紹介されたが、それまでパリに蠟人形館があることを知らず、ヨーロッパではロンドンにある「マダム・タッソー蠟人形館」の独断場だと思っていた。30分もあれば十分だろうという考えは甘かった。蠟人形が延々と続く。そういえば入場料も20ユーロと高い。現代の有名人名からフランスに関係した歴史上の人物まで多種多彩だ。サルコジ大統領がオバマ大統領やメルケル首相と並んでい

る。嬉しいのは、ここでもアズナブルに会ったことだ。小さな劇場の観客席に座っている。思わずそばの人に頼んでツーショットの写真を撮ってもらった（=写真）。十分観たとはいえないが、もうこれで満足だ。

メトロを乗り継ぎ急いでホテルに戻り、荷物をとって、RER（高速郊外鉄道）でシャルル・ド・ゴール空港へ向かう。電車の中で、アルメニア人の若い女性に空港について質問をされる。スイスのバーゼルでバイオリンを勉強中で、初めてのパリを訪れ、大きなスーツケース一杯のお土産を友達に持ち帰るのだという。同じアルメニア出身のアズナブルの話で盛り上がる。だがその後、彼女の口から空港が閉鎖されるかもしれないと知った。案の定、空港は異常な程ごった返していた。アイスランドの火山噴火の影響だ。幸いにも、ブダペストに向かうAF機はほぼ予定通り飛び立った。でも、この後、ヨーロッパ中の空港が全面閉鎖となり、ウィーンで3日間も余計に足止めを喰らうことなど想像だにしていなかったのである。束の間のパリ滞在であった。



第15回サロン仏友会のお知らせ

～講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会～

今年のボジョレ・ヌヴォオの味はどんなでしょうか。今年はこの会にふさわしくワインのお話です。

日時：2010年11月20日（土）
会場：本郷サテライト3F、8F
会費：2,000円

講演：午後2時～3時半

講師：中村日出男氏（昭49）

【モンテ物産株式会社 取締役 開発・ロジスティクス部長、ワイン・アドバイザー】

演題：「ワインよもやま話

—ワイン産地名の語源をめぐる—

講師プロフィール：

F49年卒。サントリー株式会社入社、通算十年のフランス勤務を経て、現在、イタリア食品とワインの輸入専門商社モンテ物産（株）取締役開発・ロジスティクス部長。在仏中は、1983年にサントリーがボルドーで買収したシャトー・ラグランジュの復興事業に参加。ブルゴーニュのドメーヌ元詰めワイン買い付けにも従事し、フランス各地のワインに精通。1991年に帰国。モンテ物産出向後、イタリア語とラテン語の独学にも着手し、趣味でフランスとイタリアのワイン産地名の語源研究にぞしむ。著書：ワイン専門月刊誌「ヴィノテーク」（Vinothèque）誌上にて、2008年1～12月、及び2009年はスポットにて数回、「ワイン産地名の語源をめぐるフランス&イタリア紀行」エッセーを執筆。

ブログ：<http://twilog.org/soleilvinum>・・・ツイッターで、ワイン産地名の語源についてつぶやいています。

ワイン・パーティ：午後3時半～5時

申込みは11月6日（土）まで

連絡先：

藤倉 洋一（昭45） fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
相馬 壽美乃（昭39） TEL/FAX 03-3465-6835
富山 絢子（昭39） ANB73700@nifty.com
神奈川 孝子（昭37） mt-kana@mx6.mesh.ne.jp
TEL/FAX03-3313-4310

10月半ばに、メールアドレスを登録している方にはE-mailで、その他の会員には往復はがきで個別にご案内します

新幹事紹介

宮澤樹実子（平10卒）

アパレル、在外公館派遣員（OECD代表部、パリ）等を経て、2005年よりアルタディス・ジャパンに入社。ジタン、ゴロワーズ等のフランスタバコのマーケティングを担当。2008年より現在まで日本における代表者を兼務。インペリアルタバコ（英）による買収後は、両社の日本展開全ブランドを担当。

中村日出男（昭49卒）

今年のサロンの講師をお願いしています。右の欄の「サロン仏友会のお知らせ」講師プロフィールをご覧ください。

仏友会幹事団

上記2名の新幹事がこれまでの下記幹事に加わるようになります。

神奈川 孝子（会長、昭37）、相馬 壽美乃（副会長、昭39）、藤倉 洋一（副会長、昭45）、川口 裕司（副会長、昭56）、

松本 伸夫（昭38）、富山 絢子（昭39）、坂井 英俊（昭40）、金澤 脩介（昭43）、富田 和義（昭43）、和賀 千恵子（昭45）、勝亦 杏子（昭46）、内海 和夫（昭54）、以上14名、どうぞよろしくお願い致します。

母校へのご寄付お礼

東京外国語大学異文化交流施設（アゴラ・グローバル）整備基金として、仏友会の皆様にもお願いしました募金ですが、昨年末には総額約2600万円が集まったとの報告を受けています。

仏友会でも、「仏友会として」ご寄付いただきたいと皆様にもお願いしましたところ、快くご協力いただき、総額約96万円となりました。語科別同窓会としては最高額であるとのこと、富盛副学長（F45）からもお礼の言葉を頂きました。

同施設内プロメテウス・ホールの座席9席に「仏友会」という刻印がされています。

皆様も同ホールご利用の際には、どうかご確認下さいますようお願い致します。

ありがとうございました。

仏友会会長

